完 了 報 告 書

記入年月日 2026 年 2 月 16 日
採択団体名 株式会社カラーズプランニング

■事業概要

基本情報	
事業名	全国に伝えたい ～熊本の、熊本地震の経験者たちによる、汎用性の高いコミュニティ防災教育～
事業内容	事業内容①：共助型「地域の共助を生み出すモデル」 事業内容②：自助・共助型「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」 事業内容③：自助・共助型「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと 子育て支援ネットワークが守るモデル」
事業背景	熊本市の多くの地域において、防災教育及び防災訓練は、学校と地域がそれぞれ単独に行っている現状にあり、つながりが希薄と言わざるを得ない。 そのような中、日中に発災すれば、保護者が不在の状況下で、保育士や教諭へ負担や責任が大きく偏ってしまう現状にある。 一方で、避難先として指定されている公民館や小学校に、子どもたちや地域の高齢者や障がい者の大半が避難した場合、支援者と要支援者のバランスが偏ってしまうことが予想される。 これらの現状は、資源の有効活用と共助の観点が抜けていることを示しており、備えとしては不十分と考える。次年度以降、汎用性の高いコミュニティ教育を推進するモデル事業として、全国に横展開を目指す。

コミュニティ 設立の経緯	事業内容①：共助型「地域の共助を生み出すモデル」 【設立の経緯】 若葉校区は、熊本地震の震源地に近く甚大な被害を受けた。その中で若葉校区 4 町内は、熊本地震による被害や農家の高齢化、後継者不足等の要件が重なり、農地を宅地化してアパート経営を始める農家もでてきた。一戸建ての建売住宅や賃貸アパートができることによって、若い世代・子育て世代が、短期間に当該地区に流入し、土着の住民のコミュニティと顔の見える関係性にない状況がみられるようになった。 一方で、昔から当該地区（若葉校区 4 町内）に住んできた住民が、コミュニティの拠点として長い間、活用してきた公民館が老朽し、耐震の心配があり、新たな拠点を模索している。 そこで新たな拠点として保育所「カトレア保育園」を選定。流入者（若い世代・子育て世代）と土着の住民とのコミュニケーション構築やカトレア保育園を避難先および地区住民の拠点化。そして、避難先の乳幼児を地域で守る共助型の構築を目指す。 事業内容②：自助・共助型「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」 【設立の経緯】 春日校区では、避難所運営委員会や春日校区防災士会などが中心となり、精力的に震災対処訓練等を展開しているが、その取り組みに災害弱者や小学生などを含む若い世代の参加が少なく、共助の仕組みが成立しづらい状況にある。また、JR 熊本駅ができて新しい住民が流入し、顔が見える関係が薄くなっている中で、小学校と地域の人たちの関係性も薄くなってきている。そこで防災に対する取り組みを通して、地域の方々と子どもたちが顔の見える関係性を作り、そこから保護者に呼びかけることによって地域との関係性を構築する。 そのために、春日小学校関係者や小学生を主体としたコミュニティを設立し、防災教育の拠点とし、避難所運営委員会（春日校区の各種団体が含まれる）や春日校区防災士会、行政（西区役所）の協力の下、避難所運営のほか、小学生が日ごろから危険回避や要支援者のことを考える端緒とする。 事業内容③：自助・共助型「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと 子育て支援ネットワークが守るモデル」 【設立の経緯】 城南小学校は、コミュニティスクールに位置付けられ、子育て支援ネットワークは学校と連携して子育て支援活動（乳幼児向け「たんぽぽクラブ」、幼児向け「わたげクラブ」）を展開しており、小学生だけでなく、大人、乳児、幼児が集う場であるため、小学生にも出来る役割が求められる。そこで熊本市立城南小学校を拠点に、小学生、その保護者、子育て支援ネットワーク（各種団体の長＋保育園幼稚園の先生で構成）、城南小学校評議会、行政（南区南部まちづくりセンター）で実施体制を構築。乳児から小学生までの子どもを中心とした災害時の見守り体制を構築。避難者が自分にできることを考える機会の創出や児童が日ごろから危険回避や要支援者のことを考える端緒とする。 「運営側の関与を意図的に最小限に抑え、参加者の当事者意識を促すこと」 運営側の過剰なサービス提供は、参加者を「お客様」化させ、自発的なコミュニティ形成を阻害する。対策として、運営は意図的に少人数（例：担当者 1 名）で関わり、参加者が「自分たちでやらなければならない」と感じる状況を作る。このアプローチにより、運営担当者がいなくても活動が続く、持続可能なコミュニティが形成される。

コミュニティ 設立の経緯	若葉４町内の事例 活動を通じて、地域住民、保育園、保護者、園児間のつながりが生まれた。 春日・城南地区（学校）の事例 ・授業のプロである学校の先生に対し、「これなら自分たちでもできるかも」と 思わせる働きかけが重要。 ・担当者１名が手法を伝えることで、先生は「２クラスあるから２人でやればできそうだ」と 具体的な実行イメージを持てる。 ・授業に地域住民の参加を促すことで、先生や子どもたちとの関わりが生まれる。春日のケースでは、 子どもが地域の行事に親を連れてくることで、親も地域とつながる流れができた。 学校におけるコミュニティ形成の鍵は、先生のモチベーション向上である。 ・先生方が活動を「楽しい」と感じることが、活動の継続とコミュニティ形成に不可欠である。 ・先生が「活動を伝えたい」と思うことで、学級通信などを通じた保護者への情報発信が自然に増え、 保護者の関心を引くきっかけとなる。
本事業に関する過去の取り組み内容	防災教育としての実績はないが、熊本地震発震後から行政より受託した広報誌等の取材・撮影・執筆の取り組みを通して、熊本市内のさまざまな地域と密接に関わり、活動を後押ししてきた経緯があり、本事業実施の礎となっている。
事業体制	事業内容①：共助型「地域の共助を生み出すモデル」 ・保育所「カトレア保育園」（カトレア保育園関係者、在園児の保護者、卒園児、卒園児の保護者） ／企画・運営、園児や保護者への周知 ・４町内自治会／企画・運営、町内会住民への周知 ・行政（東区役所、秋津まちづくりセンター）／企画・運営、活動のつなぎ役 事業内容②：自助・共助型「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」 ・春日小学校関係者、小学生／企画・運営、防災授業の構築・実施 ・避難所運営委員会（春日校区の各種団体が含まれる）／企画・運営、震災対処訓練の統括 ・春日校区防災士会／企画・運営、ブース運営 ・行政（西区役所、西部まちづくりセンター）／企画・運営、活動のつなぎ役 事業内容③：自助・共助型「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと 子育て支援ネットワークが守るモデル」 ・城南小学校関係者、小学生、その保護者、卒業生、卒業生の保護者 ／企画・運営、防災授業の構築・実施 ・子育て支援ネットワーク（各種団体の長＋保育園幼稚園の先生で構成） ／企画・運営、子育てサークルでの研修会企画・広報 ・学校評議委員会／周知・広報 ・行政（南区南部まちづくりセンター）／企画・運営、活動のつなぎ役 事業監修・指導 ・NPO 法人くまもと災害ボランティア団体ネットワーク（KVOAD） 事業推進・窓口 ・株式会社カラーズプランニング

			若葉校区４町内	春日校区	城南校区
全体スケジュール	9	24		運営委員会打ち合わせ	
		26		防災士と打ち合わせ 運営委員会打ち合わせ	
		30		防災授業(４年)	
	10	2		西区と打ち合わせ 運営委員会打ち合わせ	
		4		まつり会場で告知	
		6		防災授業(４年)	
		7			校長打ち合わせ
		8	執行部と打ち合わせ		
		14			評議員と打ち合わせ
		17		日赤と打ち合わせ	
		19	自治会と打ち合わせ		
		22		防災授業(４年) 運営委員会打ち合わせ	
		26	新住民の交流会		
	11	4		４年担任と打ち合わせ	
		5		運営委員会打ち合わせ	
		8		事前準備	
	11	9		震災対処訓練	
		11			６年担任と打ち合わせ ５年担任と打ち合わせ
		25			支援センター打ち合わせ
		27			子育てサークル防災研修 南区と打ち合わせ
		29	保育園園長と打ち合わせ		

12	2	全体打ち合わせ		防災授業（6 年）
	3		地域で振り返り	防災授業（6 年）
	4		学校で振り返り	企業との打ち合わせ
	13	園と地域の交流会		
	15		児童と振り返り	
	16	全体打ち合わせ		
1	3	保育園と打ち合わせ		
	7			学校・地域の打ち合わせ
	11	交流イベント		
	13			防災授業（5 年）
	14			防災授業（5 年）
	15			交流イベント現地確認
	21			防災授業（5 年）
	22			防災授業（5 年）
	24			交流イベント
	28	振り返り		

事業目標・事業成果	
事業目標全般 （教育提供者側）	■株式会社カラーズプランニング 教育機関と地域団体が協働して防災教育に取り組める。
事業成果全般 （教育提供者）	3 事業全体の主要な成果は、各現場から次年度以降の継続要望が出たことである。 春日小学校の事例 ・校長から 4 年生担当教員へ、今回の活動の課題と成果を指導案としてまとめるよう指示が出た。 ・来年度は年間を通して体系的に他事業と連携できるよう検討が進んでいる。 ・4 年生教員は「春日小の 4 年生はこれをやる」という定番活動にすべく前向きに準備中。 ・熊本市西区が次年度に「熊本地震から 10 年」の事例発表会を予定しており、その中で春日小学校の取り組みが地域防災教育の事例として取り上げられる予定。 ・古町小学校の 4 年生とオンラインでつなぎ、防災授業について発表する予定。 城南小学校の事例 ・今年度活動した 5 年生が来年度 6 年生になる際、発展的な活動ができないか教員間で検討が始まっている。 ・運営側に対し、アイデア提供の協力依頼があった。 若葉 4 町内の事例 ・①保育園行事への地域住民参加、②地域への保育園訪問、③「どんど焼き」の 3 つの活動継続要望がある。

事業目標全般 （参加者側）	■防災教育の参加者 地域にどんな人が暮らしているかを理解し、自分自身にできることを主体的に考えることができる。
事業成果全般 （参加者側）	3 つの地域のいずれも活動の中心が、学校や地域住民が主体となって実施したため、「自分たちがやる」という意識が醸成されている。 若葉４町内の具体例 ・地域の指導者（竹細工担当の園長、元教員の高齢者など）が自発的に現れ、役割分担が自然発生している。これにより、運営側の協力を得ることができ、自走する体制が構築されつつある。 ・地域の重鎮が自発的に他の参加者に教え始め、世代間交流の好循環が生まれている点が反省会でも高く評価された。 ・地域の防災訓練を通じて、住民に新たな意欲が生まれている。 子どもたちが防災訓練で「バケツリレー」を知らなかったことがきっかけとなり、これまで自治会活動に参加していた住民たちが、子どもたちに防災知識を教えることに意欲を示している。参加者からは「来年も教えてやるよ」といった、教える側としての積極的な声が出ている。 春日小学校の具体例 春日校区では現場教師も地域住民の顔と名前を把握し、地域の重要メンバーも教師の名前を言えるレベルの関係性を構築。校長だけでなく現場教師と地域住民が直接つながることで、防災授業実施時に地域の人々を自然に巻き込み、主体的に取り組む体制ができている。 城南小学校の具体例 コミュニティスクール支援員を中心とした乳幼児子育てクラブとの連携が特徴。11 月に乳幼児クラブで防災研修を実施し、6 年生が小学生だけでなく未就学児まで含めて、知ってほしい防災知識を伝えるウォークラリーを 1 月に実施。5 年生が考えた「避難所でできること」は南部まちづくりセンターにも掲示され、広く地域住民への情報発信を行っている。
展開できる 知見やノウハウ	地域の方々は学校に対して一緒に活動しましょうという気持ちは強いが、どのように関わればいいか、声をかければよいかが難しい。また、学校側でも地域と一緒に活動したいが、どこまでお願いできるのか、何をお願いできるのかが分からない。学校と地域が防災教育を通して、互いに関わり合う入口を作ることで、新たな活動が展開されていく。 今年度実施した授業のスキームは、他校でもそのまま展開可能である。 ・参加した子どもたちの反応は良好で、地域住民も参加している。 ・実施の段取りが固まっているため、今年のスキームはそのまま横展開できる。 ・3地域で行ったモデル事業の各報告書を作成し、簡単な運営マニュアルを記載。他地域での導入検討に役立つ資料とした。 ・広く横展開するために、3 地域で行ったモデル事業を再編集し「コミュニティ防災教育パンフレット」を制作し、他地域への防災教育導入に向けた周知に活用する。
コミュニティ防災教育の重要な観点	コミュニティ防災教育の成功には、地域のキーマンの自主性を尊重することがカギ •地域で防災教育を進める上で最も重要なのは、キーマンを発見し、いかに中心的な役割を担ってもらうかである。 •担当者はキーマンに頼り、対話する機会を多くもつことで「こうしましょうか」といった自発的な提案を引き出した。 •これにより、キーマンが「自分たちでやった」という当事者意識を持つことができ、成功の要因となった。「やってもらった」では活動が持続しないという懸念が生じる。

残課題等	今後の課題として、若葉４町内としては、来年度は猛暑を避けて、これまで夏季に行われてきた各種行事が秋に集中すると考えられるほか、2 年に 1 回開催されてきた校区運動会が重なる年もあるため、今年のような大規模なイベントの継続が困難になる可能性がある。そのため、既存の地域行事を継続しながら、新たに立ち上げた防災活動をどのような形で継続していくかが重要な検討事項となっている。

■事業内容

事業内容①：共助型「地域の共助を生み出すモデル」		
事業内容①目標 （提供者側）	・教育機関と地域が互いに伝え合い、支え合うことができる関係性を構築する。	
事業内容①目標 （参加者側）	・1月11日開催予定の交流イベント「どんどやdeサバイバル@若葉」で、運営者に感謝の気持ちを伝えることができる。	
事業内容① 交流イベント （実施日： 2025/10/26）	■具体的な取り組み内容 「ワクワクキッズパーク～親子でつながる 笑顔のひととき～」 場所／若葉４町内公民館および雨宮神社 対象／若葉４町内在住者 講演会「顔の見えるつながり」（カトレア保育園　園長西原明優氏）で住民につながりをつくることの大切さを伝えた後、お楽しみイベントとして、ディスゲッター、輪投げ、ボッチャ、射的、eスポーツなどを楽しんだ。最後には参加者全員で抽選会を開催。 ■成果（提供者 or 参加者） 参加者にとって、新住民同士のつながりや若葉4町内に住み続けている住民と新住民が知り合うことができた。	
事業内容① 交流イベント （実施日： 2025/12/13）	■具体的な取り組み内容 「カトレア　クリスマスマーケット」 場所／カトレア保育園 対象／園児とその保護者、若葉４町内在住者 「おやじの会」による出し物、仮装ファッションショー、親子で踊るダンスなどのほか、園内には店舗ブースを出店。園児と保護者、地域の方々が一体となったイベントで交流を深めたほか、自治会役員を招いて顔のつながりをつくった。 ■成果（提供者 or 参加者） 普段は保育園内に入ることのない近隣の住民が保育園の存在を認知し、交流することで、今後の活動へのつながりが生まれた。	

<table>
<tr><td>事業内容①
交流イベント
（実施日：
2026/1/1）</td><td colspan="2">■具体的な取り組み内容
「どんどや de サバイバル@わかば」
場所／若葉 6 丁目多目的広場
対象／園児とその保護者、若葉校区住民

新年の恒例行事「どんどや」と防災体験を組み合わせた防災イベント。住民が集まる地域行事を生かして防災意識を高めようと「カトレア保育園」の協力の下、初開催。子どもたちが竹筒を自ら加工し、竹筒炊飯に挑戦したり、近くの水路から水を運ぶバケツリレー、水消火器を使った消火体験、ロープワークの体験などを行った。

■成果（提供者 or 参加者）
当初は自治会役員と保育園関係者中心の運営を予定していたが、経験豊富な地域の高齢者が「俺ができるぞ」「もっとこうしなければ」と自発的に参加し、指導に加わった。体験家族の増加に伴い、教える人も自然に増える好循環が生まれた。自分たちで集まり、できることを探しながら継続可能なつながりが生まれ、何かあった時にすぐに集まれる関係性が育まれることを確認した。</td><td>
</td></tr>
<tr><td>事業内容①を実施する中で発生した課題や失敗点</td><td colspan="3">■発生した課題や失敗点
伝えることや周知の難しさは課題の一つ。自治会、保育園、学校など、個人のつながりはあるものの団体としての協力体制を深めることの必要性を感じた。

■乗り越えた方法
つながりが薄い中でも、地域の団体や自治会、子ども会など、既存のつながりを生かして告知を行った。</td></tr>
<tr><td>事業内容①を実施する上で工夫した点</td><td colspan="3">事業を推進する上で、地域で中心となる人たちと、まずは担当者がしっかりとつながることが大切である。丁寧に対話することで、協働の糸口をつかんだ。</td></tr>
<tr><td>事業内容①
残課題等</td><td colspan="3">事前に予想参加者数を前提に竹を切って準備していたが、想定以上の参加者と指導者が集まったため、もう少し規模を拡大してもよかった。また、子どもたちのバケツリレー実施時、舗装道路での車両通行への対応について、校区全体への周知が行き届かず、通行者への配慮が足りなかった。今後は、町内レベルと校区レベルで情報伝達方法を使い分けるなど、配慮を行う必要がある。</td></tr>
<tr><td colspan="4">事業内容②：自助・共助型「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」</td></tr>
<tr><td>事業内容②目標
（提供者側）</td><td colspan="3">熊本市立春日小学校と地域団体が協働して防災教育に取り組める。</td></tr>
<tr><td>事業内容②目標
（参加者側）</td><td colspan="3">防災についての知識を学び、自分自身にできることを主体的に考えることができる。</td></tr>
</table>

事業内容② 交流イベント （実施日： 2025/10/4）	■具体的な取り組み内容 「春日ぼうぶらまつり」 場所／アミュひろば（JR 熊本駅白川口） 対象／児童とその保護者、春日校区住民 阿蘇猿回し劇場やバナナのたたき売り、バルーンパフォーマンス、和太鼓演奏などのほか、屋台が立ち並ぶ地域の秋祭り。会場では、防災ブースを設置し、マイタイムライン制作を行ったほか、11月９日に開催する「震災対処訓練」への参加を呼び掛けた。 ■成果（提供者 or 参加者） 普段地域活動に参加していない人や興味を持っていない人にも広く周知することができた。	
事業内容② 防災授業（4 年） （実施日： 2025/10/6･22、 12/4･15）	■具体的な取り組み内容 「防災授業」 場所／熊本市春日小学校とその周辺 対象／児童 春日校区避難所運営委員会、熊本市社会福祉協議会、障がい者支援センター、西区保健子ども課、日本赤十字社熊本県支部が連携し、春日校区の住民が避難所でどのように暮らし、どんなことに困難を覚えたのかを知り、困難を乗り越えるために自分でできることを考えた。 ■成果（提供者 or 参加者） グループに分かれて、被災者の気持ちを考えながら、提案することができた。 令和８年２月 20 日に開催される古町小学校との交流発表会で、４年生が防災学習の成果を発表することが決定している。	
事業内容② 震災対処訓練 （実施日： 2025/11/9）	■具体的な取り組み内容 「震災対処訓練」 場所／熊本市春日小学校とその周辺 対象／４年生、保護者、春日校区住民 災害デジタルウオークラリーでは、児童が登下校の危険カ所を調査し、それを基に避難所運営委員会でデジタルウオークラリーを作成。校区を３つに分けて、それぞれに２つずつの QR コードを設置し、イベント当日には保護者と児童が QR コードを読み込んで避難所へ ■成果（提供者 or 参加者） 児童はグループに分かれて、震災対処訓練を体験。避難所運営や防災行動について。避難者の気持ちを考えながら、さまざまな提案ができた。	

事業内容②を実施する中で発生した課題や失敗点	■発生した課題や失敗点 難しかったのは、学校と地域の調整。学校には授業時間数があり、授業にはテーマも決められている。地域の方も伝えたいことがあり、それをどのよう引き出して、調整できるか。よりよい妥協点を見つけることができるかが課題となった。 ■乗り越えた方法 学校と地域の声を聞き、対話をすることで調整を進めることができた。
事業内容②を実施する上で工夫した点	春日小学校は昨年度、熊本市の震災対処訓練のモデル地区に選定された。地域が自主的に継続可能な防災活動を求めていたことが、今年度の取り組みにつながった。これまで培われてきた地域と学校の見守り活動や授業参加などの関係性を基盤として、防災というキーワードで新たなつながり生まれ、持続可能な協力関係が実現した影には、学校側が主体的にこの取り組みを企画し、教員が一丸となって取り組んだことが大きい。
事業内容② 残課題等	・明らかになった課題（制度、人材、運営体制等）／なし ・今後に向けた計画変更　等／なし
事業内容③：自助・共助型「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと子育て支援ネットワークが守るモデル」	
事業内容③目標 （提供者側）	熊本市立城南小学校と地域団体が協働して防災教育に取り組める。
事業内容③目標 （参加者側）	児童が災害デジタルウオークラリー実施に向けて、積極的に関わることができる。
事業内容③ 防災研修 （実施日：2025/11/27）	■具体的な取り組み内容 子育てサークル「たんぽぽクラブ」防災研修 場所／城南地域コミュニティセンター 対象／子育て中のママ、子ども 保護者と子どもが関わり合うことができる防災工作。非常時持ち出し用キャンデー入れ作りや備蓄パンのオリジナルラベル製作を行った。 ■成果（提供者 or 参加者） 参加者は工作を通して、横のつながりを構築できた。また乳幼児への声かけなどを通して、地域の方とのつながりが深まった。

事業内容③ 防災授業（6 年） （実施日： 2025/12/2･3･4）	■具体的な取り組み内容 「防災授業」 場所／熊本市城南小学校とその周辺 対象／児童、保護者、消防団 災害デジタルウオークラリーのクイズや QR コードの設置場所を決めた。1 学期に児童は、地域の安全確認を行っていたので、「災害時に活用できる校区内の安全な場所を知ってほしい」という思いで、クイズや QR コードの設置場所を考えた。 ■成果（提供者 or 参加者） 子どもたちが防災という視点で地域を見直す契機となった。	
事業内容③ 防災授業（5 年） （実施日： 2026/1/13･14･21･22）	■具体的な取り組み内容 「防災授業」 場所／熊本市城南小学校とその周辺 対象／児童、保護者 体育館を舞台に、日常生活から避難所生活で必要なことを抽出し、さまざまな立場の人（高齢者、乳幼児連れの母親、障害者など）の視点で避難所環境を考察する授業を実施した。色覚障がいに見立てたアイマスクを付けたり、けがに見立てて三角巾で腕を固定するほか、高齢者や妊婦の体の動きを体感するための器具を身に付けて、実際にその立場になって避難所体験を行うことで、避難者への理解を深め、自分たちに何ができるのか、「避難所での困りごと」を洗い出し、困りごとを解決するための対策を考えた。 また、実際に高齢者や子育て中のお母さんなどが会場を訪れ、子どもたちのインタビューに答え、熊本地震で経験した避難所での暮らしなど語り継いだ。 ■成果（提供者 or 参加者） 子どもたちが避難所体験や地域インタビューを通して、“共助”の大切さと自分にできる支援を考えた。「避難所での困りごと」と対策提案は、学校内だけでなく南部まちづくりセンターに掲示され、より広い地域住民に情報発信している。	
事業内容③ （5 年） （実施日： 2026/1/24）	■具体的な取り組み内容 「災害デジタルウオークラリー」 場所／南部まちづくりセンターと城南校区 対象／児童、保護者、城南校区住民 校区内の危険箇所に設置された QR コードを読み込み、3 択クイズに答えてめぐる親子参加型ウォークラリー。ゴールの南部まちづくりセンターでは、防災ワークショップを実施。アルファ米体験のほか、参加者には携帯トイレを配布。 ■成果（提供者 or 参加者） 子どもたちが主体となって、クイズを考えるなど、これまでの学びを地域イベントへ還元。「避難所での困りごと」と対策提案は、子どもたちがパネルに仕上げ、学校	

	内だけでなく南部公民館にも掲示され、より広い地域住民に情報発信している。	
事業内容③を実施する中で発生した課題や失敗点	■発生した課題や失敗点 ・防災授業などの取り組みを行っていることを各団体や地域の方々に周知することが難しい。 ・1 月 24 日の「災害デジタルウオークラリー」では、参加者が大幅に減少。雨天・寒冷な天候に加え、実施期間が短かったことで、授業の実施からイベント当日までの短期間での告知が行き届かなかった。 ■乗り越えた方法 ・伝えることを諦めないこと。継続していると徐々に伝わっていく。広報マンは子どもたちであり、地域の方々も支援してくれる。 ・来年度は学校として、ウォークラリーを授業として取り組むことも視野に検討している。授業内容を積極的に提案した結果、教師や地域の方々から「もっとやりたい」という声が上がり、5 年生は当初予定より多い時間数を確保。今年度の経験により、来年度はより深い連携が可能になると期待している。	
事業内容③を実施する上で工夫した点	城南小 6 年生は総合的学習で地域調査を実施し、1 学期に安全・危険箇所を地図化していた。当初は交通事故や車両通行の視点だったが、12 月に防災視点を追加。消防団員が 8 月大雨時の対応を説明し、ハザードマップと地域住民の実体験の重要性を伝えた後、ウォークラリー形式で防災クイズを実施した。また、子育てサークルを中心に行った防災研修では、参加者が増えるようにと、おやつや食事の提供を、サークルの運営者がしてくれた。城南小 5 年生の避難所体験授業では、地域の方が 5 年生と一緒に活動できるようにした。	
事業内容③ 残課題等	・明らかになった課題（制度、人材、運営体制等）／なし ・今後に向けた計画変更　等／なし	

■参考資料
・運営体制図　➡完了報告書に体制を記載
・講義プログラム　➡各モデル事業ごとの報告書に記載
・研修/講演資料　➡別添
・使用した調査票、ヒアリング項目、集計結果　➡なし
・写真や図面、レイアウト　➡各モデル事業ごとの報告書に掲載および別添資料
・スケジュール表　➡完了報告書に実施スケジュールを記載
・実施マニュアル等　➡各モデル事業ごとの報告書にメイン事業の運営マニュアルを記載
・その他、モデル活動に重要な書類

避難所で

高齢者が困ること

避難所で

障がい者が困ること

避難所で

妊婦さんが困ること

避難所で

ケガ人が困ること

2016/4/15

どんな人が来ますか？

マンホール
トイレ

簡易ベッド

食事を配る

	2限	3限
1班		
2班		
3班		
4班		

やってみて気づいたこと！

５年１組　名前（　　）

１回目の体験ブース（　　）	
○○になって気づいたこと	○○を支援して気づいたこと
どんなときの、どんな動きが大変だったかな どんなお手伝いがあったら助かったかな	何が大変そうに見えたかな 大変そうなとき、何をしてあげることができたかな

２回目の体験ブース（　　）	
○○になって気づいたこと	○○を支援して気づいたこと
どんなときの、どんな動きが大変だったかな どんなお手伝いがあったら助かったかな	何が大変そうに見えたかな 大変そうなとき、何をしてあげることができたかな

地域の人にインタビュー

避難所にいる人にインタビューしてみよう！

５年１組　名前（　　）

１回目の体験ブース（　　）	
質問	分かったこと

２回目の体験ブース（　　）	
質問	分かったこと

「全国に伝えたい
～熊本の、熊本地震経験者たちによる、
汎用性の高いコミュニティ防災教育～」とは

当事業では、状況の異なる 3 つの地区で、当該地区に最適な拠点や体制を結び付け、社会資源の有効活用とステークホルダーの学び、拠点と自助共助スキームの『もやいなおし』を展開します。

type ①
共助型「地域の共助を生み出すモデル」

type ②
自助・共助型「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」

type ③
自助・共助型「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと子育て支援ネットワークが守るモデル」

［制作］
株式会社カラーズプランニング

［監修］
NPO 法人くまもと災害ボランティア団体ネットワーク
理事　水野直樹

令和 7 年度地域防災力の向上に資する

コミュニティ防災教育推進事業

①

共助型「地域の共助を生み出すモデル」

若葉 4 町内
（熊本市）

全国に伝えたい
～熊本の、熊本地震の経験者たちによる
汎用性の高いコミュニティ防災教育～

熊本地震後、新たに暮らし始めた若い世代のつながりをつくる。保育園を拠点に地域とつながり、防災活動に取り組む

①共助型「地域の共助を生み出すモデル」

現状

若葉校区は、熊本地震の震源地に近く甚大な被害を受けた。その中で若葉校区 4 町内は、昔から自宅に近接して農地を持ち、農業を営む農家が多い地区であったが、熊本地震による被害や農家の高齢化、後継者不足等の要件が重なり、農地を宅地化してアパート経営を始める農家も出てきた。一戸建ての建売住宅や賃貸アパートができることによって、若い世代・子育て世代が、短期間に当該地区に流入し、土着の住民のコミュニティと顔の見える関係性にない状況がみられるようになった。一方で、昔から当該地区（若葉校区 4 町内）に住んできた住民が、コミュニティの拠点として長い間、活用してきた公民館が老朽し、耐震の心配があり、新たな拠点を模索している状況。

拠点

保育所「カトレア保育園」

体制

カトレア保育園関係者、在園児の保護者、卒園児、卒園児の保護者、4 町内自治会、行政（東区役所、秋津まちづくりセンター）

目的

・流入者（若い世代・子育て世代）と土着の住民とのコミュニケーション構築
・カトレア保育園を避難先および地区住民の拠点化
・避難先の乳幼児を地域で守る共助型の構築

防災教育内容

・熊本地震後、新たに暮らし始めた若い世代のつながりをつくる活動
・保育園での新旧園児、その保護者がつながる活動
・保育園を中心とした地域と保育園関係者が知り合い、防災活動を推進

工夫

まずは新しい住民同士が交わる機会からはじめ、次に土着の住民に広げる。保育園関係者には、土着の住民と新しい住民、両方に関わる人材がいることから、つなぎ役として保育園という場を活用する。

【事業体制】

・保育所「カトレア保育園」（保育園関係者、卒園児、在園児・卒園児の保護者）
➡企画・運営、園児や保護者への周知

・若葉 4 町内自治会
➡企画・運営、町内会住民への周知

・行政（東区役所、秋津まちづくりセンター）
➡企画・運営、つなぎ役

ワクワクキッズパーク
～親子でつながる笑顔のひととき～

期日／令和 7 年 10 月 26 日（日）9：00 ～ 12：00
場所／若葉 4 町内公民館及び雨宮神社境内
主催／若葉 4 町内自治会
協力／熊本市子ども会育成協議会、４町内子ども会
対象／若葉 4 町内在住者

【プログラム】

9：00 ～　ジュニア・リーダーの手遊びレク
　　講演会「顔の見えるつながり」
　　カトレア保育園 園長　西原明優氏
9：30 ～　お楽しみイベント
　　・射的、ディスゲッター、輪投げ、
　　ボッチャ、e スポーツなど
10：50 ～ お楽しみ抽選会

講演会「顔の見えるつながり」では、カトレア保育園園長西原明優氏が、住民につながりをつくることの大切さを伝えた後、お楽しみイベントとして、ディスゲッター、輪投げ、ボッチャ、射的、e スポーツなどを楽しんだ。最後には参加者全員でお楽しみ抽選会を開催。新住民同士のつながり、さらに以前から住んでいる住民と新住民が声を掛け合う機会となった。

カトレア
クリスマスマーケット

期日／令和 7 年 12 月 13 日（土）10：00 ～ 12：45
場所／カトレア保育園
主催／カトレア保育園
対象／園児とその保護者、若葉 4 町内在住者

【プログラム】
10：00 ～　園児 ステージ横に集合
10：15 ～　クリスマスマーケットスタート
・園長あいさつ
・つくし組 : ジングルベル
・れんげ組：イチゴサンタクロースと踊りましょう
・すみれ組：サンタクロースはどこのひと
10：45 ～　店スタート
11：05 ～　カトレアの先生すごいんだぞゲーム
11：25 ～　おやじの会　出し物
12：00 ～　仮装ファッションショー
12：35 ～　踊り「金のガチョーラ」
12：45　　カトレアクリスマスマーケット終了

園児たちによるステージや「おやじの会」による出し物、仮装ファッションショー、親子で踊るダンスなどのほか、園内には店舗ブースを出店。園児と保護者、地域の方々が一体となったイベントで交流を深めたほか、自治会役員を招いて顔のつながりをつくった。普段は保育園内に入ることのない近隣の住民が保育園の存在を認知し、交流することで、今後の活動へのつながりがうまれた。

どんどや de サバイバル
@若葉

期日／令和 8 年 1 月 11 日（日）10：00 ～ 12：00
場所／若葉 6 丁目多目的広場
主催／若葉 4 町内自治会　共催／カトレア保育園
対象／園児とその保護者、若葉校区住民

【プログラム】
竹 de 炊飯・むすん de ロープ・水消化器 de 消火・バケツ de リレー

新年の恒例行事「どんどや」と防災体験を組み合わせた防災イベント。住民が集まる地域行事を生かして防災意識を高めようと「カトレア保育園」の協力の下、初開催。子どもたちが竹筒を自ら加工し、竹筒炊飯に挑戦したり、近くの水路から水を運ぶバケツリレー、水消火器を使った消火体験、ロープワークの体験などを行った。当初は自治会役員と保育園関係者中心の運営を予定していたが、経験豊富な地域の高齢者が「俺ができるぞ」「もっとこうしなければ」と自発的に参加し、指導に加わった。体験家族の増加に伴い、教える人も自然に増える好循環が生まれた。自分たちで集まり、できることを探しながら継続可能なつながりが生まれ、何かあった時にすぐに集まれる関係性が育まれることを確認した。

防災体験イベント 運営マニュアル

1. 実施概要

日時／ 2026 年 1 月 11 日
会場／若葉 6 丁目多目的広場
点火／ 10：30
活動時間／点火後〜約 1 時間（おき火状態まで）

2. 当日タイムライン

8:30　カトレア保育園集合・積込（担当：全体）
9:00　会場搬入・設営開始（担当：各担当）
10:00　最終安全確認（担当：本部）
10:30　点火／大人のみ実施（担当:どんどや担当）
10:35　竹炊飯開始（担当：炊飯担当）
10:40　工作・ロープ展開（担当：各担当）
随時　水消火器／バケツリレー (担当:訓練担当)
11:30　終了・撤収開始（担当：全体）
※雨天時など「どんどや」中止時は延期し、カトレア保育園で「ミニどんどや」を企画。

3. プログラム別運営要領 優先度★★★★★

① 竹炊飯（先着 15 名）
・受付で参加管理
・米 5kg 使用（想定：15 食）
・備蓄水使用
・火気周辺は立入制限
・子どもは必ず大人帯同

② 竹工作（皿・箸・コップ）
・刃物使用時は必ず大人補助
・作業スペースをブルーシートで区画
・切りくず即時回収

③ ロープワーク
・約 30m 範囲確保
・首に巻き付けない指導徹底
・終了後は速やかに回収

④ 水消火器訓練（5 本）
・安全距離確保
・的を明確に設定
・連続放射防止（1 人 1 回）

⑤ バケツリレー
・約 30m 直線導線確保
・転倒防止のため走らせない
・水量は最小限

4. 物品管理チェック

[若葉 4 町内]
☐ 米 5kg
☐ 水 500ml×72 本
☐ バケツ
☐ 保険確認

[熊本市東区役所 総務企画課・秋津まちづくりセンター]
☐ 水消火器 5 本
☐ ロープ
☐ 備蓄水 3 箱

[カトレア保育園]
☐ 竹加工済
☐ 工作道具
☐ コンロ
☐ ブルーシート
☐ 廃材・マッチ

[共通]
☐ お土産 150 セット

5. 安全管理原則

重点リスク：1. 火傷 2. 転倒 3. 刃物によるケガ 4. 混雑による接触事故

基本ルール
・火元から半径 2m 立入制限
・刃物は子ども単独使用禁止
・走らないように声掛けを徹底

6. 事故発生時対応

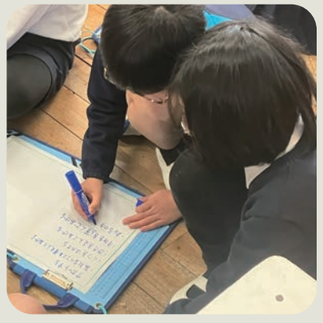
① 二次被害防止
② 本部報告
③ 保護者連絡
④ 応急処置
⑤ 必要時 119 通報
⑥ 記録作成
　＊軽微でも必ず記録を残すこと。

7. 成功基準

・重大事故ゼロ
・竹炊飯 15 名完遂
・子ども参加多数
・撤収時間内完了
・安全最優先で運営すること。

令和７年度地域防災力の向上に資するコミュニティ防災教育推進事業

全国に伝えたい
～熊本の、熊本地震の経験者たちによる汎用性の高いコミュニティ防災教育



［制作］
株式会社カラーズプランニング

［監修］
NPO 法人くまもと災害ボランティア団体ネットワーク
理事　水野直樹

「全国に伝えたい
～熊本の、熊本地震経験者たちによる、
汎用性の高いコミュニティ防災教育～」とは

熊本地震から 10 年―。
多くの地域において、防災教育及び防災訓練は、学校と地域がそれぞれ単独に行っている現状にあり、双方のつながりが希薄であると言わざるを得ない状況が続いています。
もし、日中に発災すれば、保護者が不在の状況下で、保育士や教諭へ負担や責任が大きくなるといえるでしょう。
一方で、避難先として指定されている公民館や小学校に、子どもたちや地域の高齢者や障がい者の多くが避難した場合、支援者と要支援者のバランスが偏ってしまうことも予想されています。
そこで、小学校区単位をコミュニティととらえつつ、避難先となる社会資源と地域の守るべき対象を見直し、防災拠点と自助共助の「もやいなおし」のプロセスをとおして、小さなコミュニティ単位における現実味の高い防災教育が「コミュニティ防災教育」です。

令和７年度には、「地域防災力向上に資する『コミュニティ防災教育推進事業』（内閣府）の採択を受け、熊本市の３つの地区で実践活動を行いました。
当該地区に最適な拠点や体制を結び付け、社会資源の有効活用とステークホルダーの学び、拠点と自助共助スキームの『もやいなおし』を展開した３つの事例をご紹介します。

type ①　若葉４町内

共助型「地域の共助を生み出すモデル」

➡コミュニティ拠点「保育所 カトレア保育園」

type ②　春日校区

自助・共助型「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」

➡コミュニティ拠点「春日小学校」

type ③　城南校区

自助・共助型「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと子育て支援ネットワークが守るモデル」

➡コミュニティ拠点「城南小学校」

①

共助型「地域の共助を生み出すモデル」

熊本地震後、新たに暮らし始めた
若い世代のつながりをつくる。
保育園を拠点に地域とつながり、
防災活動に取り組む

目的
・流入者（若い世代・子育て世代）と土着の住民とのコミュニケーション構築
・カトレア保育園を避難先および地区住民の拠点化
・避難先の乳幼児を地域で守る共助型の構築

防災教育内容
・熊本地震後、新たに暮らし始めた若い世代のつながりをつくる活動
・保育園での新旧園児、その保護者がつながる活動
・保育園を中心とした地域と保育園関係者が知り合い、防災活動を推進

【事業体制】
・保育所「カトレア保育園」（保育園関係者、卒園児、在園児・卒園児の保護者）
➡企画・運営、園児や保護者への周知
・若葉４町内自治会
➡企画・運営、町内会住民への周知
・行政（東区役所、秋津まちづくりセンター）
➡企画・運営、つなぎ役

②

自助・共助型
「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」

児童が通学路の危険を探る。
地域の要支援者を知り、
自ら自助の精神を育んでいく。
「避難所から地域人を知る」防災教育

目的
・避難所運営委員会による受入シミュレーション（トライアル＆エラー）
・避難者が自分にできることを考える機会の創出
・児童が日ごろから危険回避や要支援者のことを考える端緒とする

防災教育内容
・避難所運営に関する勉強会
・避難所運営訓練の内容検討
・児童が自分を守るための勉強
　➡授業「テーマ：避難所から地域人を知る」展開
・春日校区での秋まつりで、避難所運営訓練についての告知
・11 月 9 日避難所運営訓練

【事業体制】
・春日小学校関係者、小学生
➡企画・運営、防災授業の構築・実施
・避難所運営委員会（春日校区の各種団体が含まれる）
➡企画・運営、震災対処訓練の統括
・春日校区防災士会
➡企画・運営、ブース運営
・行政（西区役所・西部まちづくりセンター）
➡企画・運営、つなぎ役

③

自助・共助型
「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと
子育て支援ネットワークが守るモデル」

守られる立場から守る立場へ
乳幼児や要配慮者の想いを知り
共助における役割を考える。
「避難所から地域人を知る」防災教育

目的
・乳児から小学生までの子どもを中心とした災害時の見守り体制を構築
・避難者が自分にできることを考える機会の創出
・児童が日ごろから危険回避や要支援者のことを考える端緒とする

防災教育内容
・大人が乳児を守るための研修会
・幼児が命を考えるイベント
・児童が自分を守るための勉強
　➡授業「テーマ：避難所から地域人を知る」展開
・子どもたち企画「災害デジタルウォークラリー」
・南部まちづくりセンターに避難所を再現

【事業体制】
・城南小学校関係者、小学生
➡企画・運営、防災授業の構築・実施
・子育て支援ネットワーク
（各種団体の長＋保育園幼稚園の先生で構成）
➡企画・運営、子育てサークルでの研修会企画
・学校評議委員会➡周知・広報
・行政（南区南部まちづくりセンター）
➡企画・運営、つなぎ役

令和７年度地域防災力の向上に資する

コミュニティ防災教育推進事業

②

自助・共助型
「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」

春日小学校
（熊本市）

全国に伝えたい
～熊本の、熊本地震の経験者たちによる
　汎用性の高いコミュニティ防災教育～

「全国に伝えたい
～熊本の、熊本地震経験者たちによる、
　汎用性の高いコミュニティ防災教育～」とは

当事業では、状況の異なる３つの地区で、当該地区に最適な拠点や体制を結び付け、社会資源の有効活用とステークホルダーの学び、拠点と自助共助スキームの『もやいなおし』を展開します。

type ①
共助型「地域の共助を生み出すモデル」

type ②
自助・共助型「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」

type ③
自助・共助型「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと子育て支援ネットワークが守るモデル」

［制作］
株式会社カラーズプランニング

［監修］
NPO 法人くまもと災害ボランティア団体ネットワーク
理事　水野直樹

児童が通学路の危険を探る。
地域の要支援者を知り、
自ら自助の精神を育んでいく。
「避難所から地域人を知る」防災教育

②自助・共助型「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」

現状

春日校区では、避難所運営委員会や春日校区防災士会などが中心となり、精力的に震災対処訓練等を展開しているが、その取組に災害弱者や小学生などの参加が少なく、共助の仕組みが成立しづらい状況にある。

拠点

熊本市立春日小学校

体制

避難所運営委員会（春日校区各種団体が含まれる）、春日校区防災士会、行政（西区役所・西部まちづくりセンター）

目的

・避難所運営委員会による受入シミュレーション（トライアル＆エラー）
・避難者が自分にできることを考える機会の創出
・児童が日ごろから危険回避や要支援者のことを考える端緒とする

【事業体制】

・春日小学校関係者、小学生
➡企画・運営、防災授業の構築・実施
・避難所運営委員会（春日校区の各種団体が含まれる）
➡企画・運営、震災対処訓練の統括
・春日校区防災士会
➡企画・運営、ブース運営
・行政（西区役所・西部まちづくりセンター）
➡企画・運営、つなぎ役

防災教育内容

・避難所運営に関する勉強会
・避難所運営訓練の内容検討
・児童が自分を守るための勉強
　➡授業「テーマ：避難所から地域人を知る」展開
　A. 地域にはどんな人が暮らしている？
　B.〇〇な人（高齢者・妊婦・障がい者・幼児）の行動を体験
　C. 避難所の暮らしを知ろう（避難経験者にインタビュー）
　D. どんなことに困るかな？
　E. 私にできることは何だろう？
　※宿題付き「登下校の際の危険個所を撮影しよう」（子ども目線で危険個所を探る）
・春日校区での秋まつりで、避難所運営訓練についての告知
・11 月 9 日避難所運営訓練

「災害デジタルウォークラリー実施」児童が宿題で撮影した場所をラリー地点とし、4 年生はラリー地点を通って避難所（春日小学校）へ行く。親子参加の場合、登下校路を子ども目線で確認する。

「体育館に避難所再現」体育館に避難所を再現し、そこに訓練に参加する住民を受け入れる。児童が授業を通して気づいたことを、言葉として貼りだす。貼りだすことによって、多くの子どもたちの声を地域住民と共有する。

効果

児童が日ごろの通学路の危険個所を確認する機会や地域の要支援者への必要な支援について考えることで、まずは自助の精神を確立し、さらには自分に出来ることを考え、災害時においても相手のことを考えた行動をとる中で、共助の精神を身に着けることができる。

春日ぼうぶらまつり
～実りの秋 食欲の秋 春日の秋まつり～

期日／令和 7 年 10 月 4 日（日）12：00 ～ 18：30
場所／アミュひろば（JR 熊本駅 白川口前）
主催／春日ぼうぶらまつり実行委員会
共催／春日校区自治協議会、株式会社 JR 熊本シティ
対象／春日校区住民

【プログラム】
12：00 ～　ステージイベント
　・主催者あいさつ
　・くまモンがやってくる！
　・春日保育園や KASUGA よんちょうめ保育園、花陵中学校吹奏楽部などの皆さんのステージ
　・春日わくわく体操　ほか多数
18：00 ～　抽選会

阿蘇猿回し劇場やバナナのたたき売り、バルーンパフォーマンス、和太鼓演奏などのほか、屋台が立ち並ぶ地域の秋祭り。会場では、防災ブースを設置し、マイタイムライン制作を行ったほか、11 月 9 日に開催する「震災対処訓練」への参加を呼び掛けた。普段地域活動に参加していない人や興味を持っていない人にも広く周知することができた。

防災授業（4 年）

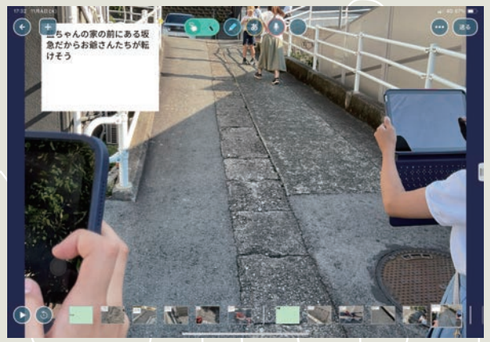
期日／令和 7 年 10 月 22 日（土）2 時限～ 5 時限
場所／春日小学校とその周辺
主催／春日小学校
対象／児童、保護者

【プログラム】
2 時限　全体説明
「避難所で、まちの人になってみよう①」
3 時限　「避難所で、まちの人になってみよう②」
4 時限　「避難所に来た人にインタビュー」
２～３時間目の振り返り（質問を考える）
「避難所に来たまちの人に聞いてみよう①」
・質問した体験を踏まえて質問を考える
「避難所に来たまちの人に聞いてみよう②」
・まとめ
5 時限　「続けなければならない暮らしの活動で困ることは？」
・グループごとにまとめる
・発表➡「困ること」を 11 月 9 日に開催する
「震災対処訓練」で掲示

春日校区避難所運営委員会、熊本市社会福祉協議会、障がい者支援センター、西区保健子ども課、日本赤十字社熊本県支部が連携し、春日校区の住民が避難所でどのように暮らし、どんなことに困難を覚えたのかを知り、困難を乗り越えるために自分でできることを考えた。グループに分かれて、被災者の気持ちを考えながら、提案することができた。

震災対処訓練

期日／令和 7 年 11 月 9 日（日）9：30 ～ 12：45
場所／春日小学校体育館
主催／春日校区自治会連合会
協力／熊本駅前看護リハビリテーション学院
対象／児童、保護者、春日校区住民



【プログラム】
避難所体験、救護・福祉体験、炊き出し体験（だご汁）、新聞紙炊飯
防災用品展示、災害デジタルウオークラリーほか

災害発生時における地域の共助力向上を目的として、春日校区全体で実施する体験型震災対処訓練。災害デジタルウオークラリーでは、児童が登下校の危険カ所を調査し、それを基に避難所運営委員会で問題を作成。校区を3つに分けて、それぞれに2つずつのQRコードを設置し、イベント当日には保護者と児童が QR コードを読み込んで避難所へ。児童はグループに分かれて、震災対処訓練を体験。避難所運営や防災行動について。避難者の気持ちを考えながら、さまざまな提案ができた。

震災対処訓練 運営マニュアル

1. 実施概要

期日／令和 7 年 11 月 9 日（日）
　　9：30 ～ 12：45
場所／春日小学校体育館

【担当】
総務情報班／受付、本部運営、情報整理、全体調整
救護福祉班／救護対応、要配慮者支援、健康体操
食料物資班／炊き出し、物資管理、配布対応
環境衛生警備班／誘導、警備、環境衛生管理

2. 当日タイムライン

8:00　スタッフ集合・準備開始（班別作業）
9:30　全体朝礼／役割・注意事項共有
10:00～10:30　避難者受付／状況により延長可
10:00～11:40　各種体験・展示／流動型運営
11:30～12:00　防災教育／全体放送で案内
12:10 頃　炊き出し配布
12:45　片付け開始（班別）

3. 受付・避難者対応（総務情報班）

【役割】
・全体運営の中枢（本部機能）
・受付・名簿管理・情報整理
・各班・全体の調整

【主な手順】
①来場者を「避難者」として迎える
②名簿への記入（氏名・自治会・人数）
③訓練体験カード配布
④グループ分け（30～35 名程度）
⑤展示・体験エリアへ誘導

【注意点】
・混雑時は記入簡略化を優先
・高齢者・子ども連れは優先対応

4. 誘導・動線管理（環境衛生警備班）

【役割】
・誘導・警備
・環境衛生管理
・安全確保

・入口・受付・展示エリアに誘導係を配置
・固定動線は設けず、混雑状況を見て調整
・危険箇所（段差・コード類）は随時確認
・車両誘導は最優先で安全確保

5. 救護・福祉対応（救護福祉班）

【役割】
・救護・福祉対応（救護福祉班）
・救護所運営
・要配慮者支援
・健康体操・ケア対応

【救護対応】
・軽傷や体調不良は救護所で対応
・重症や判断困難な場合は 119 番通報

【要配慮者対応】
・無理な体験参加は求めない
・付き添い・休憩を柔軟に案内

6. 炊き出し・物資配布（食料物資班）

【役割】
・炊き出し訓練
・食料・物資管理

【炊き出し運営】
・前日調理・当日再加熱を徹底
・手袋・マスク着用
・食品アレルギー表示を掲示

【配布ルール】
・避難者優先配布
・スタッフは原則後回し
・不足時は班長判断で調整

7. 防災教育パート運営

・全体放送で開始案内
・体験中の避難者を順次誘導
・子ども・大人ともに参加可能

8. 緊急時対応

事故・怪我発生時➡本部へ即連絡
天候急変時➡屋内誘導を優先
不審者・トラブル➡複数人で対応

9. 終了・撤収

①12:45 より片付け開始
②忘れ物確認
③備品・資材の原状回復
④簡易振り返り実施

令和７年度地域防災力の向上に資する

コミュニティ防災教育推進事業

③

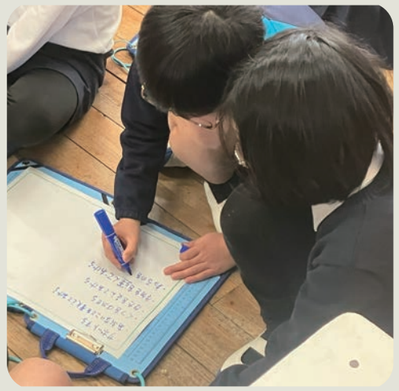
「全国に伝えたい
～熊本の、熊本地震経験者たちによる、
汎用性の高いコミュニティ防災教育～」とは

当事業では、状況の異なる３つの地区で、当該地区に最適な拠点や体制を結び付け、社会資源の有効活用とステークホルダーの学び、拠点と自助共助スキームの『もやいなおし』を展開します。

type ①
共助型「地域の共助を生み出すモデル」

type ②
自助・共助型「地域の防災士が構築する自助・共助モデル」

type ③
自助・共助型「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと子育て支援ネットワークが守るモデル」



自助・共助型
「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと子育て支援ネットワークが守るモデル」

城南小学校
（熊本市）

全国に伝えたい
～熊本の、熊本地震の経験者たちによる
汎用性の高いコミュニティ防災教育～

［制作］
株式会社カラーズプランニング

［監修］
NPO 法人くまもと災害ボランティア団体ネットワーク
理事　水野直樹

守られる立場から守る立場へ
乳幼児や要配慮者の想いを知り
共助における役割を考える。
「避難所から地域人を知る」防災教育

③自助・共助型「乳児幼児児童を対象にコミュニティスクールと子育て支援ネットワークが守るモデル

現状

城南小学校は、コミュニティスクールに位置付けられ、子育て支援ネットワークは学校と連携して子育て支援活動（乳幼児向け「たんぽぽクラブ」、幼児向け「わたげクラブ」）を展開しており、小学生だけでなく、大人、乳児、幼児が集う場であるため、小学生にも出来る役割が求められる。

拠点

熊本市立城南小学校

体制

城南小学校関係者、小学生、子育て支援ネットワーク（各種団体の長＋保育園幼稚園の先生で構成）、学校評議委員会、行政（南区南部まちづくりセンター）

目的

・乳児から小学生までの子どもを中心とした災害時の見守り体制を構築
・避難者が自分にできることを考える機会の創出
・児童が日ごろから危険回避や要支援者のことを考える端緒とする

【事業体制】

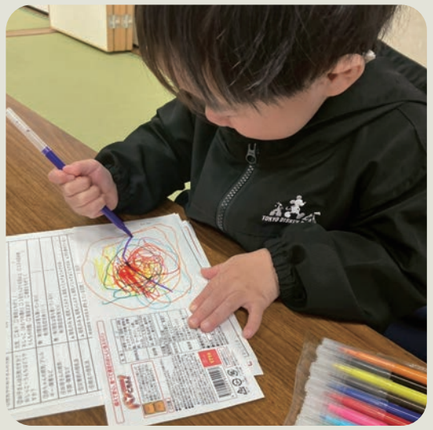
・城南小学校関係者、小学生
➡企画・運営、防災授業の構築・実施
・子育て支援ネットワーク
（各種団体の長＋保育園幼稚園の先生で構成）
➡企画・運営、子育てサークルでの研修会企画
・学校評議委員会➡周知・広報
・行政（南区南部まちづくりセンター）
➡企画・運営、つなぎ役

防災教育内容

・大人が乳児を守るための研修会
・幼児が命を考えるイベント
・児童が自分を守るための勉強
➡授業「テーマ：避難所から地域人を知る」展開
A. 地域にはどんな人が暮らしている？
B.〇〇な人（高齢者・妊婦・障がい者・幼児）の行動を体験
C. 避難所の暮らしを知ろう（避難経験者にインタビュー）
D. どんなことに困るかな？
E. 私にできることは何だろう？
(子ども目線で危険個所を探る)
・子どもたち企画「災害デジタルウォークラリー」
6 年生が考えた災害時に知っておいてほしい場所をラリー地点とし、参加者はラリー地点を通って避難場所（南部まちづくりセンター）へ行く。親子参加の場合、登下校路を子ども目線で確認する。
・南部まちづくりセンターに避難所を再現
「食べる・寝る・出す（トイレ）」をテーマに避難所を体験。また 5 年生が授業を通して気づいたことを、言葉として貼りだす。貼りだすことによって、多くの子どもたちの声を地域住民と共有する。

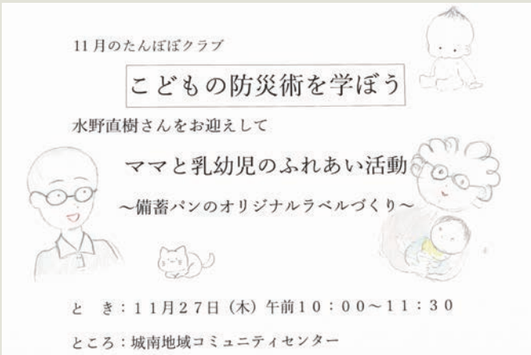
効果

コミュニティスクールにおいて、守られる対象とされてきた児童が、自身より年少の乳幼児を守る立場になることで、共助における自身の役割を自ら考え、災害時において要支援者のことを考えた行動をとることができる。



子育てサークル「たんぽぽクラブ」防災研修

期日／令和 7 年 11 月 27 日（木）10：00 ～ 11：30
場所／城南地域コミュニティセンター
対象／ 子育て中のママ、子ども



【プログラム】
・防災ふれあい活動
・備蓄パン配布
・お土産あり

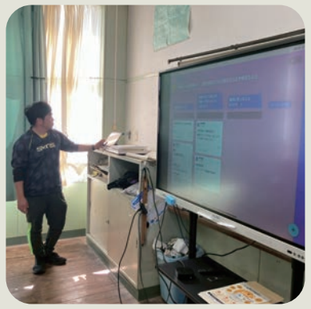
保護者と子どもが関わり合うことができる防災工作。非常時持ち出し用キャンデー入れ作りや備蓄パンのオリジナルラベル製作を行った。参加者は工作を通して、横のつながりを構築できた。また乳幼児への声かけなどを通して、地域の方とのつながりが深まった。

防災授業（6 年）

期日／令和 7 年 12 月 2 日（火）・3 日（水）
場所／城南小学校とその周辺
主催／城南小学校
対象／児童

【プログラム】
1 時限　防災の専門家に「災害」がもたらす被害について
　　教えてもらおう
2 時限　地域の消防団から「8 月の大雨の被害」について
　　教えてもらおう
3 時限　聞いたことやハザードマップから
　　城南校区の危ない場所、安全な場所を調べよう
4 時限　「多くの人に知ってほしい災害のこと」を
　　クイズにして伝えよう

城南校区 6 年生は、1 学期に安全・危険箇所を地図化していた。当初は交通事故や車両通行の視点だったが、12 月に防災視点を追加。消防団員が 8 月大雨時の対応を説明し、ハザードマップと地域住民の実体験の重要性を伝えた後、ウォークラリー形式で防災クイズを実施した。「災害時に活用できる校区内の安全な場所を知ってほしい」という思いで、クイズや QR コードの設置場所を考えることにつながり、子どもたちが防災という視点で地域を見直す契機となった。



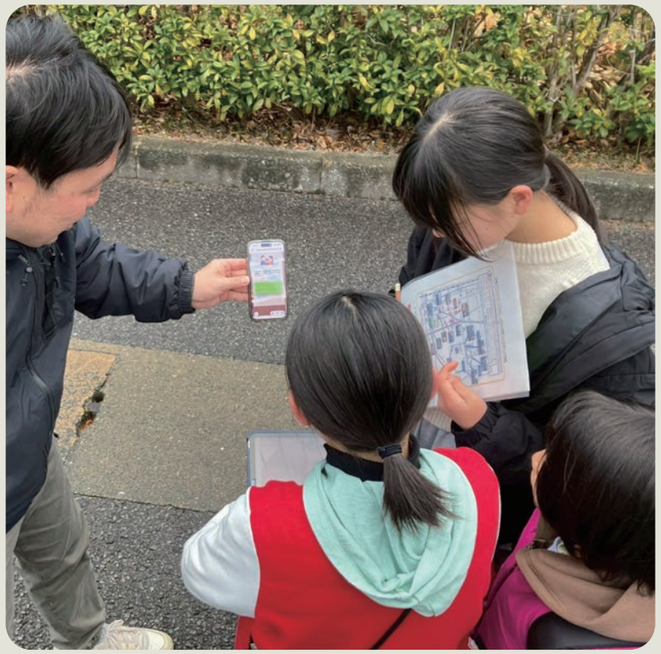
防災授業（5 年）

期日／令和 8 年 1 月 13 日（火）・14 日（水）
　　・21 日（水）・22 日（木）
場所／城南小学校体育館
対象／児童、自治会・関係団体

【プログラム】
●事前・導入授業
日時／ 2026 年 1 月 13 日（火）
内容／防災の基礎理解、地域を知る学習

●避難所体験・インタビュー
日時／令和 8 年 1 月 14 日（水）
1 時限　全体説明
　　「避難所で、まちの人になってみよう①」
2 時限　「避難所で、まちの人になってみよう②」
　　・振り返り
3 時限　2～3 時間目の振り返り（質問を考える）
　　「避難所に来たまちの人に聞いてみよう①」
　　・質問した体験を踏まえて質問を考える
　　「避難所に来たまちの人に聞いてみよう②」
　　・まとめ

●振り返り
日時／令和 8 年 1 月 21 日・22 日
4 ～ 5 時限　「続けなければならない暮らしの活動で
　　困ることは？」
　　・グループごとにまとめる
　　・発表



災害デジタルウオークラリー

期日／令和８年１月２４日（土）
場所／南部まちづくりセンターと城南校区
対象／児童、保護者、城南校区住民

校区内の危険箇所や安全な場所に設置されたQRコードを読み込み、３択クイズに答えてめぐる親子参加型ウォークラリー。ゴールとなった南部まちづくりセンターには、避難所を再現。「食べる・寝る・出す（トイレ）」のワークショップを実施。子どもたちが主体となって、クイズを考えるなど、これまでの学びを地域イベントへ還元。「避難所での困りごと」と対策提案は、子どもたちがパネルに仕上げ、南部まちづくりセンターに掲示され、より広い地域住民に情報発信している。

【プログラム】
災害デジタルウオークラリー
・QRコードクイズ
・親子参加型地域巡回
・防災食・携帯トイレ体験

防災授業 運営マニュアル

1. 実施概要

期日／令和８年１月14日（水）
場所／城南小学校体育館

【担当】
統括責任者／全体進行管理、関係機関連絡調整
リスク管理・判断
学校担当／児童管理、時間割調整、会場確保
自治会担当／地域協力者調整、イベント告知
安全管理責任者／事故対応、救護体制確認
保険加入確認

【事前準備】
☐ 体育館レイアウト決定
☐ ４ブース設営
☐ 体験備品確認（高齢者キット・妊婦ジャケット・ゴーグル・三角巾）
☐ 役割分担表作成
☐ 保険加入確認
☐ 緊急連絡体制確認

2. 当日タイムライン

9:00　スタッフ集合・設営最終確認
9:30　協力者受付
9:40　授業開始・全体説明
9:50　ブース体験①（15分）
10:10　ローテーション
10:30　ブース体験②
11:00　インタビュー準備
11:10　地域住民インタビュー
11:50　まとめ・振り返り
12:20　終了・撤収

3. 避難所体験

７～８人 ×4グループで実施。高齢者体験／障害者体験／妊婦体験／けが人体験は、２人１組で「体験者」「支援者」を交代で体験。寝るスペース、トイレ、食事提供などを巡回する。

4. 地域住民インタビュー

高齢者・妊婦・障害者・けが人役の方に児童が直接質問。「困ること」「子どもたちにできる支援」を学ぶ。

5. まとめ・振り返り

［１月21日（水）・22日（木）］
体験・インタビュー内容の整理、模造紙へのまとめ

災害デジタルウオークラリー運営マニュアル

1. 実施概要

期日／令和８年１月24日（土）
場所／南部まちづくりセンターと城南校区

【担当】
統括責任者／全体進行管理、関係機関連絡調整
リスク管理・判断
学校担当／児童管理、時間割調整、会場確保
自治会担当／地域協力者調整、イベント告知
安全管理責任者／事故対応、救護体制確認
保険加入確認

【事前準備】
☐ QRコード設置許可確認
☐ ルート安全確認
☐ 受付名簿作成
☐ 配布物準備（アルファ米・携帯トイレ）
☐ 雨天対応判断基準決定

2. 当日タイムライン

9:00　スタッフ集合、
災害デジタルウオークラリー スタート
10:00　南部まちづくりセンター集合
10:30　ワークショップ開始
12:00　閉会

3. 安全対策

・各ポイントに見守り配置
・緊急時連絡網共有
・天候悪化時は中止判断

4. 備品管理

・QRコード掲示物
・アルファ米
・携帯トイレ
・掲示用模造紙
＊使用後は数量確認・破損チェックを行う。

5. リスク管理

・安全最優先
・即時報告
・判断は統括責任者が行う
・イベント保険加入状況確認、施設利用規定遵守